

【ポスター発表】

福祉系大学生の障がい者に対する態度について —障がい者のイメージ—

○ 金城大学 岡村 綾子 (003446)

〔キーワード〕福祉系大学生, 障がい者, イメージ

1. 研究目的

社会福祉系大学の学生は学年進行に伴い障がい者に対する理解が進み、障がい者に対する態度の変化もみられるようであったので、昨年度は障がい者に対する態度について調べた。その結果、障がい者に対する顕在的態度と非顕在的態度とは一致しないと報告した。このように一致しない結果は、現行の制度あるいは教育のあり方などが影響していると言えるが、実際には文化的、慣習的な変数などが複雑に影響し合った複合的な事態が考えられる。そこで、非顕在的態度に及ぼす変数を抽出する必要がある。その手始めとして、障がい者と聞かれた場合の障がい者のイメージについて検討することにした。

2. 研究の視点および方法

研究の視点：障がい者と聞かれた場合の障がい者のイメージとそれを考えた理由から、障がい者の理解に影響を及ぼす変数を探る。

研究方法：調査対象 A福祉系大学の2015年度3年生154人を調査対象とした。

調査内容 障がい者に関する読書の有無、障がい者に関するテレビ等の視聴の有無、障がい者と聞かれた場合の障がい者のイメージとその理由、初めて障がい者と関わった時期、町の中の障がい者のための設備、知っている障がい者すべてを列挙させるなどとした。

調査手順と調査用紙の回収 年度初めのオリエンテーションの機会を利用して質問紙を配布し、自記式集合調査を行った。質問紙調査用紙は154人に配布し、146人から回収できた（回収率94.8%）。

3. 倫理的配慮

調査対象者には、研究の趣旨と内容、得られたデータは研究目的以外には使用しないことについて事前に説明した上で調査への参加を要請し、調査参加をもって研究協力受諾とした。また、調査結果においては検討・分析に際して個人が特定できないように配慮した。

4. 研究結果

「障がい者と聞いた場合、その障がいとはどんな障がいを考えるか」という質問に対して、113人が回答した。障がい名を2つ以上列挙している場合、例えば知的障がいと精神障が

いが挙げられている場合は知的障がいと精神障がいに分けてカウントした。その結果によれば「知的障がい」を挙げた者が64人で最も多かった。次に「身体障がい」が48人、続いて「肢体不自由」が23人、「精神障がい」が17人、「視覚障がい」が7人、「聴覚障がい」と「発達障がい」が各々6人、「ダウン症」と「自閉症」が各々5人であった。

障がい名を2つ以上列挙した者は113人中54人であった。2つ以上列挙された障がい名のうち、「知的障がい」を挙げている者は37人、「身体障がい」を挙げている者は31人、「精神障がい」を挙げている者は12人であった。また、障がい名を1つだけ挙げた59人のうち「知的障がい」を挙げた者が18人で最も多かった。次いで「肢体不自由」が15人、「身体障がい」が9人であった。

「その障がいを考えた理由」については、「知的障がい」を挙げた場合には、「よく見かけるから」「実習で行ったから」「コミュニケーションの取り方の違いが印象的だから」などの理由が記載されていた。「身体障がい」を挙げた場合は、「よく見かけるから」「目で見てわかる」「目に見える障がい」「授業やテレビでよく扱われるから」などの理由が記載されていた。そして、「肢体不自由」を挙げた場合は、「よく見かけるから」「車いすなどで移動しているイメージが強かったから」などの理由が記載されていた。また、「精神障がい」を挙げた場合は、「授業で習った」という理由かもしくは理由が記載されていなかった。

5. 考察

障がい者と聞かれた場合に思いつく障がいとしては、最初に教えられた障がいについてのイメージが強いはずだから、肢体不自由、視覚障がいや聴覚障がい回答として多く挙げられるのではないかと予測していた。しかし、知的障がいを挙げるものが多かった。その理由として、授業で習ったり、実習で関わったり、大学の最寄り駅の近くにある施設に通う障がい者を通学の際に見かけるなどと記載されていた。また、肢体不自由を挙げる学生が比較的少ないのは、身体障がいに肢体不自由を含めて考えている学生が少なからずいるとみられる。このことは、身体障がいを挙げた理由が肢体不自由を挙げた理由とよく似ているからと考える。知的障がい、身体障がい、肢体不自由は外見上から障がいであることに気づきやすいが、視覚障がいや聴覚障がいは外見からのみではわかりにくく、特に聴覚障がいは実際に見かけても殆ど気づかない。したがって、本研究の結果から、障がい者のイメージは、社会福祉系の大学生でさえ見てすぐ気付くことに強く影響されていると考えられる。視覚や聴覚の障がいは感覚障がいであるために入力の故障であると説明を受ければ理解は比較的容易である。ところが精神障がいについては外見上からのみでは全く分からないので教わったことにすべて依存するかしかなないので、障がいのイメージが容易ではない。障がいのイメージが容易でないことは障がいの理解が容易でないことになる。

なお、「身体障がい」という言葉には、肢体不自由、視覚障がい、聴覚障がい、内部障がいが含まれ、用語としての問題があるように思われる。